

令和2年度 実務実習教科担当教員会議 議事録

1. 開催日時：令和3年3月13日（土）10:00～11:20

2. 開催様式：オンライン会議（Zoomを使用）

3. 出席者：100名定員（118名のアクセス）

4. 本会議

（1）開会の挨拶 北陸大学 石川和宏

（2）「医療安全を主旨とした講義科目に関するアンケート調査」報告（配布資料）

報告者 名城大学 野田幸裕

（3）講演「日本医療薬学会における認定薬剤師制度の見直しと医療薬学専門薬剤師制度」（配布資料）

演者 国際医療福祉大学 百瀬泰行 先生

（4）講演「実務実習生のプロフェッショナル意識向上に向けた

評価ツール P-MEX の適用と取り組み」（配布資料）

演者 慶應義塾大学 鈴木小夜 先生

（5）次回開催案内・閉会挨拶 北陸大学 石川和宏

5. 会議報告

（1）開会の挨拶

本年度の委員長である石川和宏（北陸大学）より開会の挨拶にて、昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により日本薬学会第140年会（京都）が現地開催を見送ったことを踏まえ、本会も残念ながら開催を断念せざるを得ない状況となってしまったことについて説明があった。薬学臨床系教員連絡会との合同開催についても実現には至らなかった。今年度は対面形式での実現がかなわず、Zoomによるオンライン共催に至ったことが説明された。

（2）「医療安全を主旨とした講義科目に関するアンケート調査」報告

実務実習を履修する中で医療安全に関する討議や考察を行うことにより、適切な提案等が実施できるような専門職技能の修得に寄与できることが考えられた。そこで、学内教育として実際どの程度関連した授業等が実施されているかを明確にすることを目的に、本アンケートを実施した。全国75薬系大学の内、47大学より回答（62.7%）があった。9割以上の大学から、医療安全に関する講義や演習が必要である旨の回答が得られたが、その実施状況としてはその割合をやや下回るものであった。各学年での実施状況は、4年次が最も多く次いで5年次となっていた。チームパフォーマンスと患者安全を高めるためのツールと戦略に Team STEPPS などのチームワーク改善手法を導入しているところは、1割程度であった。講義・演習に関する実施事例の自由記載からは、専門知識が修得されてきている4年次に特に工夫を凝らした本内容に関する種々の手法を積極的に投入している現状が確認できた。また、特記事項の記載内容からは、医療安全に関する講義・演習の位置づけとして薬剤師として必要とされる総合力を育成する上で有用であるという見方が大成を占めていた。

（3）講演「日本医療薬学会における認定薬剤師制度の見直しと医療薬学専門薬剤師制度」

日本医療薬学会において新たに創設された臨床系教員向けの専門薬剤師認定制度について紹介された。本制度の制定に合わせて、乱立していたいくつかの制度について統廃合し、医療薬学専門薬剤師制度、地域薬学ケア専門薬剤師制度、及びがん専門薬剤師・薬物療法専門薬剤師制度の大きく3つに分類され、取得条件等の共通化も図られた。臨床系教員の制度は、実務経験に加えて実務能力と教育上の指導能力、及び研究能力の向上を図ることが目的とされ、医療施設での研修や学会発表をはじめ論文作成も含まれるものとなっていた。今後この制度を有効に利用することで臨床系教員の指導能力の向上に寄与できるのではないかと期待が寄せられているとのことであった。

(4) 講演「実務実習生のプロフェッショナル意識向上に向けた評価ツール P-MEX の適用と取り組み」

実務実習生が修得すべき臨床技能に関わる総合力の一つに、プロフェッショナリズムが上げられるが、現在のところこの点について評価解析している事例は皆無で今後実務実習における教育の質を向上させる上で非常に重要な指標となる可能性があることから、本研究に取り組みられたとのことであった。プロフェッショナリズムは、医療専門職集団が定義するのではなく、専門職集団に権力と責任を委譲することで社会が定義するものであり、相互の信頼関係が必要不可欠なものであるとのことであった。特に求められるコンピテンシーとしては、資質、知識、価値観、態度、行動、及び能力であり、その総合力が実際身についているかが、医療専門職としては非常に重要でプロフェッショナリズムとして表現されている所以であるとのことであった。これらのコンピテンシーを評価するツールとして医師向けに開発されたものが Professionalism Mini-Evaluation Exercise (P-MEX)であり、今回は対象を実務実習生として評価解析を行った。薬局実習と病院実習でそれぞれ解析したところ、病院の方が医師・患者関係の構築能力が勝っているという結果が得られ、両実習の特性が明確に示された。また、評価解析結果より得られた問題点としては両実習とも振り返りとされる省察能力に向上が認められなかったことが上げられていた。このことから、学内での実務事前学習時にこの能力の育成により力を注ぐ必要があるのではないかと考察されていた。今後の実務実習における教育の質の向上を図る上で、非常に重要な知見であるとのことであった。

(5) 次年度以降の開催について

今後の状況を鑑みながら、共同開催をベースに会議内容について十分に吟味を図りながら対面あるいはオンラインでの開催を判断していきたい旨が説明された。

次年度開催予定：日本薬学会第142年会の開催様式を踏まえ決定する予定。

次年度委員長：北陸大学 石川和宏

次年度副委員長：名城大学 野田幸裕

(6) 閉会の挨拶 北陸大学 石川和宏

6. ZOOM へのアクセスが100名制限であったため、参加・視聴できなかった先生方には、講演された先生方の許可を得て、後日、動画視聴希望者に対して、視聴期間の期限付きで視聴できるようにした。

以上